

「幻の首相」・山崎猛のルーツ



▲山崎猛肖像（個人蔵）



近現代史部会専門調査員 石井 裕 氏
（茨城県立歴史館主任研究員）

茨城県出身で最も首相に近づいた人物をご存知でしょうか？

昭和23年（1948）10月、第二次吉田茂（民自党総裁）内閣の誕生を嫌うGHQの一派が、吉田の代わりに後継首相に担ぎ出そうとした、民自党幹事長の山崎猛（水戸市出身）です。しかし、山崎は「総裁を差しおいて幹事長が首相になるなど、憲政の常道に反する」として、首班指名の直前に議員辞職願を提出し、「山崎首相」の誕生は「幻」に終わりました。当時、「山崎のハラキリ」などと報じられた同事件は、一般には「幻の首班指名」と呼ばれています。

その山崎猛のルーツは、実は常陸大宮市の下村田と長倉にあります。戦国時代の末期、佐竹義宣に仕えていた山崎家の祖・政直は、義宣の秋田移封に病気で従えず、下村田に住んだとされています。

また、その子政済は、水戸徳川家の一族である長倉松平家の始祖松平頼泰（初代水戸藩主徳川頼房の八男）に仕え、以後、山崎家は代々長倉松平家の重臣を務めました。特に、猛の祖父山崎幾之進（政徳）は、幕末期に頼位、頼讓、頼功、頼遵の4代にわたって長倉松平家を支え、その勇猛さ、峻厳さから「鬼山崎」と畏怖されたといえます（『山崎幾之進事蹟』『昭和大礼贈位書類第七冊（内ノ七）』国立公文書館所蔵）。

幾之進は、天狗党の乱で非業の死を遂げた宍戸藩主松平頼徳に関して（恐らく助命に）奔走したことから水戸藩の門閥派政権によって捕縛され、慶応2年（1866）9月に水戸の赤沼獄で獄死しました（『否塞録』〈茨城県立歴史館叢書16、2013年、111、114ページ〉）。

山崎猛は、その後、家名再興を許された幾之進の次男政愛の四男として明治19年（1886）に水戸で生まれ、長じて東京、そして朝鮮・満州へと出て行きます。

大正9年（1920）の帰国後は立憲政友会系の政治家として名を成し、最後は首班指名の寸前まで権力の座を登りつめました。現在、茨城県立歴史館で整理中の「山崎猛関係資料」（仮）には、いつの頃か、山崎が収集した下村田などの近世史料（山崎家関係）が含まれており、山崎が自身のルーツである常陸大宮市域に何らかの関心を抱いていたことがわかります。

「顔の見える近現代史」の編さんが、私たち近現代史部会のテーマの一つです。常陸大宮市にゆかりのある様々な人びとのライフヒストリーを交差させながら、「顔の見える近現代史」の編さんを実現したいと考えています。

そのためには、市民の皆さんのご協力が必要です。どうぞよろしくお願いします。



▲山崎幾之進墓碑（水戸市・高台寺）

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52 - 1111（内線344）